

～畜産農家の皆様へ～ 抗菌剤を慎重に使用しましょう。



背景

- 抗菌剤は家畜の健康を守り、安全な食品を安定的に生産するための重要な資材です。
- 抗菌剤を家畜の病気の治療に使うと、薬剤耐性菌が生き残って増えて増えることがあり(薬剤耐性菌が選択される)、抗菌剤の効きが悪くなる場合があります。
- また、薬剤耐性菌が食品などを介して人に感染した場合、人の病気の治療に使う抗菌剤が、十分に効かなくなる可能性があります。



そのため・・・

関係者が連携して抗菌剤の慎重使用に取り組むことが必要です。

目標

- ◆ 家畜での薬剤耐性菌の選択と伝播を抑える。
- 家畜での抗菌剤の有効性を保つ。
- 人への薬剤耐性菌の伝播を抑え、人の治療に使う抗菌剤(※1)の有効性を保つ。



獣医師、生産者、動物用医薬品業者、家畜保健衛生所等

慎重使用の具体的な取組

- ① 飼養環境を整え、家畜の健康を維持し、ワクチンを使って感染症の発生を予防しましょう。
- ② 過去の感染症の発生状況を確認し、原因菌を特定しましょう。
- ③ 抗菌剤を使用する場合は、まず、感受性試験などを行い、有効な抗菌剤を選びましょう。
- ④ フルオロキノロン等の第二次選択薬(※2)を最初の治療から使用するのには避けましょう。
- ⑤ 感染症や薬剤耐性菌の状況などに関する情報を、関係者間で共有しましょう。

(※1) フルオロキノロン、第3世代セファロスポリン、15員環マクロライドなどは、人の医療で重要性が高いとされています。

(※2) 第二次選択薬として承認されている抗菌剤の成分や製剤は、動物医薬品検査所HPに掲載しています。

URL: <http://www.maff.go.jp/nval/risk/index.html>

動薬検HP内で 第二次選択薬 製剤一覧

検索



◇ 抗菌剤の慎重使用の取組事例 ◇



豚

- 大腸菌症により離乳豚の10%以上が死亡
- ビコザマイシンなどの抗菌剤を使用したものの、菌が耐性化し、沈静化せず



- 抗菌剤の使用を8ヶ月間休止



- 感受性試験を行った結果、ビコザマイシンなどに対する菌の感受性が改善したため、ビコザマイシンなどの使用を再開
- 抗菌剤の選択は、感受性試験に基づいて行うことなどの取組を一層徹底



- 大腸菌症は沈静化し、死亡頭数が5%以下に減少



肥育牛

- アンピシリンなどの抗菌剤を第一次選択薬として3年間使用した結果、パストツレラ菌が耐性化し、治癒率は50%に低下



- 感受性試験で有効な抗菌剤を確認し、抗菌剤をアンピシリンからフロルフエニコールに変更
- アンピシリンは3年間使用を休止

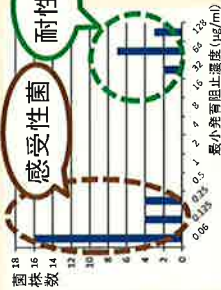


- 治癒率は90%に改善
- アンピシリンに対する菌の感受性が改善

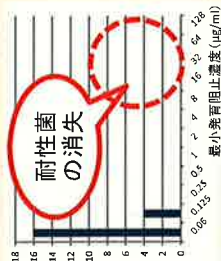
今後、フロルフエニコールの感受性が低下した場合には、再度アンピシリンを使用することを検討

パストツレラ菌のアンピシリン感受性の変化

【抗菌剤の変更前】



【変更から3年後】



※NOSA山形 加藤らのデータより引用



ブロイラー

飼養衛生管理の徹底

- 素びな導入前の水洗・消毒の徹底
- 適切な飼養管理と飼養環境づくり
- ワクチン接種の確実な実施
- 疾病や飼養管理などに関する定期的な学習会や指導



第二次選択薬の使用制限

- 第二次選択薬であるフルオロキノロンは、最終選択薬として感受性試験後に使用し、通常は使用しない



- 大腸菌症の発生病数が大きく減少
- フルオロキノロンの耐性率が減少